今昔物語 第35話

石鏃・石錐

（中垣内遺跡・西諸福遺跡）

石鏃は鏃状の小形の石器で、二等辺三角形・鍬形・柳葉形などと形態の変化に富んでおり、無柄のものと、小さい柄のあるものがあります。

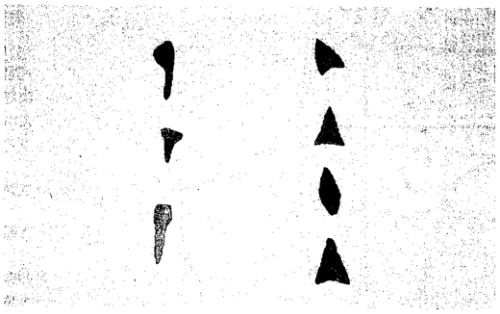
柄のある石鏃は東日本に多く分布し、西日本では極めて少ないです。

通常は打製によるものですが、特殊なものでは磨製のものがあります。また、局部磨製のものがまれに見られることがあります。

この石器は縄文・弥生時代に広く用いられ、その用途は主に矢の根として狩りに利用されたと考えられていますが、骨製の銛の先に付けて用いられた例もあります。

石錐は小孔を穿つのに用いたと考えられる小形の尖頭器で、錐や千枚通しのような機能をもった打製石器です。

石片の一端を加工して尖らしたものが多いですが、なかには柄の部分を欠く棒状のものもあり、尖頭器の断面は比較的厚く、両面または片面に打が施されているものもあります。

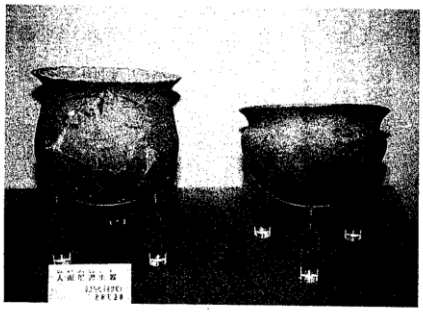


今昔物語 第36話

人面墨書土器

（北新町遺跡）

日本には、早くから年末や節季に祓えし禊ぎするという考えが浸透していました。寄り来る悪霊や害気を祓いやり、身に生じる穢れや汚れを水に禊ぎ遣り、新生を迎えようとしました。病人も同様、病の気を祓い禊ぐことにより回復を願ったのでした。古くは、この二つはそれぞれ異なったものでしたが、祓い流すという基本構造の共通性からいつしか同一視されるようになっていきました。

ところで、かぎ鼻、どんぐり眼、ひげづらの翁、そうした顔を墨描きで、いかにも戯画というにふさわしいものがあります。その壺絵の表情は大同小異、手本のあることはすぐ分かります。壺絵に描かれた老翁の顔は、多くの書物に描かれている疫病神であり、ときには閻魔大王の使者、鬼神と重なり合うものでした。こうした壺は、奈良時代末から平安時代、川や池、溝や井戸の中に流されたのです。壺の中に賄賂を入れ、そのうえ、病人の息を吹き込み、紙や布で口を縛り、水みちの彼方に祓い流したものです。病を去り陽春をもたらす重要な壺絵でありました。

疫病神の壺は、平城宮を始め東北経営の拠点多賀城、漢人や百済人が多く居住した南河内地方に集中して発見されますが、日本古来の祓禊の思想に中国道教のもつ道呪をこうした形で習合したのは西文氏や官人であろうと考えられています。